

# 障害のある若者たち

学び 就労 余暇

## 第3回

## メンズクラブのとりくみ —青年期の仲間づくり

北海道・チャレンジキャンパスさっぽろ

中山雄太



みんなで聴く曲を選ぶAくん(右)

### 今月のテーマ

第1回から第4回までは、全国各地の専攻科での実践をお伝えします。第3回は「青年期の仲間づくり」をテーマにした実践報告です。チャレンジキャンパスさっぽろは、2011年に開所した福祉型専攻科です。メンズクラブ、というユニークなとりくみを通して、一人の青年が仲間関係を深めていく姿が描かれます。

演劇道具を使って即興でポーズ！



チャレンジキャンパスさっぽろ(以下CCS)で

は18歳から25歳までの障害をもつ学生がおり、障害支援区分は3〜5の方が20数名在籍しています。CCSでは少人数での活動がいくつかあり、学年同志での活動の他に、好きなものや趣味を好きなだけ話し合う活動があります。今回はそのなかからメンズクラブのとりくみを紹介します。

### 同性での活動の必要性

CCSの活動で友人関係をつくるのが苦手、コミュニケーションをとることが苦手な学生が異性に対してスキップをすることで関係性をつくらうとすることが見られました。心理学者の榎本淳子さんの「青年は悩みや考えを語り合う同世代の友人が必要になる」、また、小学校中高学年には、同性の友人と遊ぶことを中心とした「共有活動」のなかで友人関係をつくる、という主張をヒントに、これらの不適切な行動は小学校高学年時期に経験獲得すべきことをできずにきたのではないかと仮説をたてました。そこで、メンズクラブという共有活動を中心としたとりくみのなかで友人関係づくり、コミュニケーションの仕方を経験することを考えました。メンズクラブでは、遊び(カードゲームや歌・ダンスなど)を通して「一人が楽しい」ではなく「みんなでも楽しい」ことを目的として活動しています。CCSの活動後毎日30分行っています。メンズクラブをはじめると相手に対してカッコつける必要

### 他者への関心が薄かったAくんの変化

Aくんは自分一人で行動することが好きです。誰かと帰るよりも、自分の予定を優先させたいので、帰る時も誰かを待つことなく急いで帰るような人でした。そんな彼がメンズクラブの活動を通して変わったところを紹介します。

メンズクラブではよく5〜6人でカードゲームをします。その際に音楽をかけることがあります。Aくんは音楽事情に詳しく、最新曲・アーティスト名・リリース日まですぐに出てきます。そんな彼は「今日の曲」を決める時とても積極的になります。PC操作も早いAくんは自分の聴きたい曲をすぐに入れ、そこからはAくんの独壇場となります。そこには「みんなのリクエスト」はありません。そこで「他の人も聴きたい曲があるんじゃないか？」と伝えると「そうですか」と少し考え、他の人にリクエストを聞きました。その後「Bくんはブルーハーツが好きなんですねぇ」といつも以上にうれしそうな表情を見せていました。

仲間関係をより深めていくためには、相手への興味・関心をより深めていく場をつくることに加え、学生が仲間とコミュニケーションをとっている時のやりとりを知り、「相手はどう思ったのかな?」や「こういう考え方もあるんじゃないか?」とその都度アドバイスすることが重要だと感じました。

### ケンカしてはいけない

もなくなり、過度にマウントをとることも減り、相手の話を聞いて一緒に楽しむということが増えていきました。また、同性同士特有の「少しゆるい」雰囲気、それまで自分のことを話そうとしない人たちにとって、良い作用があるように感じました。

みんなにとって仲間とはどんなものか聞いてみると「ケンカしてはいけない」という言葉が出てきます。たとえばチームで行動する授業中、一人が勝手にイライラして出ていってしまい、残った人が全部やらなくてはいけなくなってしまうことがあっても、その人が「ごめん」と謝れば「いいよ」と言ってしまう。そこには「なんで?」といった追及はありません。みんなは「ケンカしてはいけない」ということはよく知っています。しかし、「すぐに許す」ということで、そのやりとりを終わらせてしまっていることが多いと感じます。他者への意識があれば、その時に自分の思いを話したり、相手に対して「それはちがうんじゃない?」といった言葉が出てくるのではないのでしょうか。

イントロクイズ大会をした時も、豊富な知識量のAくんの独壇場でもいつも大差をつけて勝っていました。そこで、出題する方に回ってもらったのですが、Aくんしか知らない曲の問題ばかりで、誰も答えられない状況となりました。Aくんは自分の知っている曲の問題なので楽しそうですが、他の人はボカンとしている。:「これじゃあ、みんなはおもしろ